

笑いについて

(ベルグソン紹介 第1回)



中国古俑白描より 両漢時代 四川出土 陶説唱俑

野口幹夫

2004年1月21日

1、はじめに

デカルトやカント、ニーチェといったドイツ系の哲学者に比べると、ベルグソンは日本では有名ではない。20世紀のフランスの哲学者といえば、サルトルの名をまず思い浮かべる人が多い。ベルグソンの名を高校時代の恩師、加藤先生から教えられてその魅力にとりつかれた。なぜこの哲学者は日本では有名でないのか考えた。

彼の思想と方法が、ドイツ哲学のような厳密な論理の組み立てではなく、日常的な人生経験を丹念に掘り起こしながら、そのベースの上に、直感的な、天才的なひらめきとでも言うほかない優れた飛躍で、人間精神の営みの根元を解き明かしてくれる。そしてわれわれを、いまだかつてない人智の高みに引き揚げてくれるのだ。

その方法に、ついていけないためか、その高みのあまりに高いためについていけないためか、あるいは、激動の歴史が味方をしなかったためか、よくわからないが、日本ではベルグソン学派といったものは形成されなかったようだ。しかしその頂点はエベレストのように高い。彼が切り開いてくれた人生の展望を、多くの人に知ってもらいたいことと、自分自身の理解を確かめるために、この紹介文を書き始める。

第1回は、「笑いについて」を取り上げる。最近笑いは心身の健康に良いとして、笑い学会も生まれ、その効用を説く本が多く出始めた。それらの中で必ず引用されるのが、ベルグソンの「笑いについて」である。これは岩波文庫版で買うことのできる数少ない彼の作である。

2 ベルグソンの「笑いについて」

ベルグソンは、その著作活動の初期の1900年に「笑いについて」の論文を3つ続けて雑誌に発表した。20年後には改めて、まとめて単行本として刊行した。なぜ研究活動の初期に、「笑い」という見かけは軽い感じのするテーマに取り組んだのか。現代にいたって、笑いがもつ心身への医学的影響の大きさが解明されてくると、改めて人間の本質を追究する初めに、笑いを取り上げたベルグソンの先見性に気づかされる。

彼は、まず、我々は笑うことが好きであり、どんな口実であれ、笑う機会を熱心に求めてきたことを指摘する。そしてフランスの喜劇、笑劇（フェルス）、道化役者の芸

などのなかでおかしさが作られる過程を求めていくという手法をとった。

そして、笑うことの意味を、人のいのちの営みの中に、見出そうとしていく。笑いが社会や集団と結びついており、「社会が笑うとき、そこにはある意図がある。それは何か」を探求した。笑いは、現実の生活から生まれながら、芸術とも特殊なつながりをもっている。それらの関係を掘り下げることによって、逆に芸術とは何かや、人間の精神構造も透けて見えてくるのである。以下は本の順序にしたがって、要約しながら紹介する。

2-1 おかしさがある場所についての三つの基本

第1に、「本当に人間的であるものを除いては、おかしさはない。」たとえ動物や、滑稽なものを見て笑うとしても、それは、そこに人間との結びつきを読み取らなければ笑いは生まれない。

第2に笑いは、無感動、無関心が、心の環境にあつてのみ生まれる。そこに憐憫、愛情、感動などの感情の動きがあれば「笑い」は生まれない。「おかしさは、瞬間的なたましいの麻酔のようなものを必要としている。それは純粹知性に呼びかけるのだ。」

第3は、その知性は仲間のつながりを持っていなければならない。孤立していれば笑いはない。

まとめていうなれば「おかしさは、集団をなしている人々が、自分たちの感性を沈黙させ、ただ知性のみを働かせながら、全員がなかまの一人に注意を向けるときに生まれる。」

2-2 笑いを呼ぶのは、ぎごちなさ、

アメリカの古典的な喜劇映画の笑いの場面を思い浮かべてみよう。金に縁のない若者がいる。彼が、彼女の前でかっこよく高級車に寄りかかったポーズを取ったところが、彼とは関係のなかったその車がすーっと動いて、彼はすってんころりをするような場面だ。

ベルグソンは、「ぎごちなさ、ないしは惰性のせいで、事情が他のことを要求していたときに、筋肉は同じ運動を続けた。その失策を人は笑う。」生きている人間のしぐさの中に埋め込まれた「機械仕掛けの自動現象」も同じ線上にあつて、笑いを生む。「人間としての注意深い柔軟性と生き生きした屈伸性があつてほしいところに、いわば機械のぎごちなさが見られるからだ。」

放心状態、現実と離れたことに囚われての、確信的な放心状態の典型は、ドンキホ

一テであるが、それは精神における固定観念のぎこちなさであり、その姿は次々に笑いを呼ぶ。

2-3 なぜぎこちなさを笑うのか

生活と社会が人々に求めるのは、ぎこちなさや放心とは反対の、緊張と弾力 常に目覚めた注意力である。社会の構成員は、より一層高いレベルに向かって意志を組み合わせせていくことを求められている。

それに対して精神のぎこちなさや、放心は、その社会的成員の活動力が眠り込んでいるしるしであると懸念する。しかし実際に社会は被害を受けているわけではないので、その眠り込みを目覚めさせるための社会的身振りを示すことで対応する。その社会的身振りが笑いである。いわば「笑いはぎこちなさに対する罰なのである。」罰とはいえ、その「笑いは社会と当事者が、自己保存の気苦勞から解放されて、自分を芸術作品のごとくに扱い始めたその瞬間に生じるという点で、何か審美的なものを持っている。」

2-4 いのちの優美さに対抗するこわばり、ひきつり

ぎこちなさのあらわれである滑稽な表情、滑稽な動作は、こわばったもの、生あるものの中に投げ込まれた機械仕掛けの自動現象といった、いのちあるものの優美さと相容れないものである。ベルグソンはそこにある本質的なものを見いだす。

笑う原動力である人間の想像力は、はっきりとした原理に従う。すなわち「あらゆる人間的なあらわれのなかで、この想像力は、無限に柔軟で、永遠に流動する。それを牽引しているのが地球ではないことから、重力の制約さえ免れているこのたましいは、常に物質に細工する努力をしている。このたましいは、その翼ある軽やかさのいくらかを、自分が生命を与えている身体に伝えている。こうして物質のなかに移行する非物質性が、優美と呼ばれるものとなる。しかし、物質はこれに抵抗し、自己に固執する傾向を常に持っている。物質は、この目覚めた活動を自己にひきつけ、物質固有の惰性に改変し、自動現象に退化させることを欲するのだ。それは身体の知的な変化に富んだ運動を、おろかに身についた習癖に固定し、顔つきの動きのある表情を、永続するしかめ面に凝結し、つまり、生きた理想との接触で絶えず自分をあらたにするかわりに、なにか機械的な仕事の物質性のなかに没入し、吸収されていると見えるような態度をその全人間に刻みつけることを欲するのだ。こうして、物質が外面からたましいの生を鈍くし、その運動を凝結させ、ついにその優美さをそこなうことに成

功したとき、物質は身体から滑稽な効果を獲得する。」言い換えれば、生の本質である流動性や優美さの中に、固定された物質のような姿がたとえば人の表情に表れたとき、人の自動的な笑いが生じるのだ。

2-5 生あるものに埋め込まれた機械仕掛け

同様に人間の身振りや動きが、機械仕掛けであるかのようなものが笑いを呼ぶ。演説者が熱弁を振るっているとき、話に繰り返すことはないにも関わらず、演説者の身振りが周期的に同じ動きをする事に気がついた聴衆は、失笑する。笑劇ではこのパターンを意図して作る。人のしぐさをまねるときに起きる笑いもこれと同じことから来る。

別の角度からみる。ひとりの人間が一個のものである印象をあたえるとき笑いを呼ぶ。毛布の上にひっくり返されて空中にゴムまりのように放りあげられるサンチョ・パンサや、同様な効果を狙うサーカスの道化役者の芸にその例はたくさんある。

2-6 喜劇の中に仕組まれた笑い

喜劇は一つの遊び、生活をまねたあそびである。それは子供の頃の遊びと思いの中で連続している。たとえば、びっくり箱の遊びは、押さえつけられて引っ込んで、性懲りもなく出てくる登場人物や、せりふなどに、応用される。操り人形の遊びは、喜劇の中では本人はまじめに生きているのに、裏を返せば、他人が掌中でもてあそんでいるおもちゃにすぎないと言う形で、使われる。その糸の一つを観客に握らせるという手法もとられる。

さらに手の組んだ仕組みは、場面が変わりながら、同じことを機械的に繰り返す人物とか、二つの関係のない系列が交錯しているのに、当人たちは気づかないまま話が進むとかいった手法が使われる。現実にはあり得ないのに、ごく自然に起きたように見せるテクニックが喜劇作者の腕である。

なぜこの機械的な仕組みを笑うのか。人間的な生きる連続の中に、自然ならありえない闖入者として見いだされるこれらのぎごちない機械仕掛けは、人々の興味を引く。それは生の放心のようなものだからだ。絶えず自らの行路に注意深くしていたら、繰り返しも交錯も起こらないであろう。すべては前へ前へと展開し、常に歩みを進めるであろう。いふなれば、おかしさとは、人において人が「もの」に似ることである。それはすぐさま矯正されるべき欠陥を示しているのだ。笑いは人間の特殊な放心を指摘し、阻止する一種の社会的な身振りなのだ。

2-7 ことばのおかしさ (機知、ユーモアや駄洒落)

ことばが表現するおかしさと、ことばが創造するおかしさがある。後者は、他の言語への翻訳は困難であるが、その言語世界の人々には豊かな笑いをもたらす。ことばの笑いには、機知と滑稽の区分ができよう。その言葉を口にする人間が笑われるのは滑稽、第三者あるいは我々自身が笑われるとき、機知に富んでいるといえる。

広い意味では一種劇的な思考法を、機知といえるかもしれない。機知に富んだ民族は演劇の好きな民である。詩を作るのは、全身全霊をあげることが必要であるが、機知は知性だけが注入される。機知は一般に物事を演劇の相のもとに見ることにあるので、演劇芸術の一種である喜劇に活躍する。いくつかの類型をあげる。

「不合理な観念を慣用句の中に挿入する。」「一つの表現が比喩的に使われているとき、これを字義通りに理解する。」「同じ話の中に二つの観念体型を交錯させる。」「語呂合わせはその最もプリミティブなものだ。話の交錯は、どんどん複雑にできる。登場人物は互いにそれに気づかないが、観客はそれを知っている。

ある観念の自然な表現を、ある異なった調子に移調すると笑いが生まれる。荘重さを平俗さに。小さなものをそれが大きなものであるかのように。いかがわしい状況や下劣な行為を、厳密な敬意の用語で描写する。これらはイギリス的笑いだ。

ユーモアはこの種類の中にある。あるがままのものと、あるべきものの移調。それもたびたび科学的な色彩を持っている。道徳的なものの、科学的なものへの移調といえる。

言語はいのちを表している。絶えず変化し、ふくらんでいくものであるが、それがごごちないもの、できあいのもの、機械的なもの、注意に対することばの放心などが認められるや、それを人は笑い、それを矯正しようとするのだ。

2-8 性格のおかしさ 芸術的なドラマと喜劇

形、身振り、行為、ことばにしみ込むおかしさをたずねてきた。最後に、滑稽な性格、それを描く喜劇を探っていく。

人には、たましいから、たましいへ感情的な共鳴によって広がっていく感情、それは喜びであったり、憐憫であったりするものがあるが、喜劇は、他人の人柄が我々の心情を動かすのをやめるところから、始まる。喜劇は社会生活に対する硬化とでもいえるものをあつかう。他人と接触する事を心がけず、自分の道を自動的にたどる人物は滑稽である。ドンキホーテのような、系統だった放心はその代表的な例である。そのような状況に対する笑いは、それを矯正するようにうながす、一種の社会的しごき

である。喜劇はドラマよりずっと現実生活に近いところを舞台としているのはそのためである。

芸術であるドラマと喜劇の差を見ていこう。人間は、一般に、現実の物事や自然を見る際に、あるがままを見ることはせず、生きるための必要なことしか見ない。生きることとは行為することであり、そのために有用な印象だけを認識し、他は捨てている。ことばの発達は、その傾向を強調した。事物に張り付けてある札を読むにとどまることが普通になる。

芸術家は我々に代わって、事物そのものを自らの意識に到達させ、よび起こされる感動を、カンバスや楽譜や、詩、ドラマに移し替えていく。我々はそれに接することによって、普段は生活のために、覆い隠されている深い現実直面するのである。ここで表れるのは、常に一回限りの個別的で、それぞれに特異である。享受する人々が受ける心理的な効果は普遍的であろうとも、芸術の基本は個別性にある。

喜劇はその逆である。そこに現れる人物は、典型的であり、反復できる性格を提供する。滑稽さはその類型が、社会性からの放心で、かつ自動機械を連想されるぎこちない性格であるとき、笑いと呼ぶ。喜劇作家はその人物の内面には深く入らず、表れる行為や身振りに観客の注目をさせる。喜劇は芸術と生活の間の中間的なものである。

題材となる代表的な性格は、虚栄心である。自己賛美に根ざすこの性行は、どの人にも自然に内在的なものだ。それに気づき矯正することによって、後天的に獲得する性格が謙虚さである。虚栄心を直す特效薬は笑いであり、それによって矯正されないまま大きくなった人物の虚栄心は、本質的な笑いの対象となる。その変形は、フランス喜劇にたびたび登場する職業人的虚栄心がある。教師、医師などのもったいぶりや、職業的無情さとも呼ぶべき言動をするものを笑いの対象とする。

2-9 笑いは弛緩、遊戯、放心

滑稽な人物は、ある意味で共感できる人物である。笑う人は、笑われる人とともに興じるように誘い込む。社会的な矯正といっても、笑う人はそういったことを意識しないし、むしろ愛想の良い朗らかさで臨む。滑稽な人物が、社会生活から弛緩して、自動的に自分の観念をたどるとき、それは夢を見ているのと同じ弛緩に属する。それは遊戯と同じである。笑う人はその遊戯に参加する人で、「それは考える疲労から休息させてくれる」。

笑いは社会的なしごきと言っても、反省の行為から発せられるのでもない。それは社会生活の長い習慣によって、人のうちに組み立てられた機械仕掛けの作用のように、

「ひとりでに発するもの」だ。それがどこをねらっているのかわからない。意図されるのではなく、社会の自然として発せられ、矯正の効果を発揮していくものだ。「社会は、それが完成して行くにつれて、その成員からしだいに大きくなる適応の柔軟さを獲得し、その根底においてますます均衡を得る傾向にあること、社会はその表面から集団につきまとう混乱をだんだんに追い払っていること、笑いはそのために有用な機能を果たしている。」

3 笑い与健康

ベルグソンの「笑い」の探求は、見てきたとおり、人々は笑いが好きだということからはじまって、その人間的な源泉と、社会的な意味を解いた。しかし人間の笑い自体と身体機能との結びつきについては、「緊張からの放心」「考える疲労からの休息」と指摘したが、それ以上には追求しなかった。

逆に、笑いの分析はしなかったが、笑いの積極的な効果を、身をもって立証し、医学の世界にまで認知させ広めたのは、20世紀も後半になって活躍したノーマン・カズンズである。彼はアメリカの進歩的で有力なジャーナリストであった。

米ソ冷戦が激しかった1964年、彼は、文化交流の米国使節団の団長としてモスクワを訪問した。その帰国直後に、全身の激しい痛みと硬直に倒れ、そのまま起きあがれなくなる病気になったことからこの話は始まる。医師は彼の苦しみを、膠原病の劇性発現である硬直性脊椎炎とし、全快の見込みはほとんどないと診断した。持ち前の、生きるエネルギーにあふれた彼は、自分の症状を、訪ソでの疲労困憊によって身体の抵抗力が失われたためと考え、医師たちの進める薬漬け治療を辞退した。そして人間に備わっている自力快復のホメオスタシス能力を活性化させることで治癒しようと計画した。彼がしたことは、ビタミンCの大量摂取と、「笑う時間」を計画的につくることだった。彼は、映写機を借りてきてマルクス兄弟の喜劇映画をみるとか、看護婦さんにジョーク集の本を読んでもらうといった「笑い」を自らの仕事とした。それを始めてから8日目には目に見えた効果が生まれ、まもなく雑誌の編集長という現職に復帰するという奇跡を起こしたのである。

この難病克服の記録の公表は、当時アメリカの医学界に大変な衝撃を与えた。(邦訳「笑いの治癒力」岩波文庫) 彼自身その後 UCLA の医学部教授に迎えられて、笑いの治癒力の研究をすすめた。米国各地の病院でその成果が取り入れられ、1982年には米国に「笑い療法学会」が生まれた。日本にも1994年「笑い学会」が生まれた。

笑いが、人間の健康に与える影響は、系統的に研究されて、生理学的根拠も解明されていった。

4、笑いの身体効用の仕組み、

「笑い」について現代医学が解明した二つの重要な事柄を紹介する。以下は、笑いを治療に取り入れて活動し、笑い学会の設立に加わった大阪の谷口病院の昇幹夫医師と倉敷の柴田病院の伊丹仁朗医師の書から引用する。（笑いは心と脳の処方箋 昇幹夫著 二見書房）（アレン・クライン笑いの治癒力 創元社1997 あとがきより）

4-1 笑いによる免疫細胞の活性化

吉本興業の協力を得て、大阪のなんばグランド花月に十九人のボランティアを集め、漫才・漫談・吉本新喜劇を見せて、三時間笑わせた。その直前、直後の血液を検査し、成分の変化を測定した。

二種類の項目の検査をした。そのひとつはナチュラルキラー細胞の強さの測定である。キラー細胞というのはリンパ球の一種で、ガン細胞を攻撃破壊する働きをしている。常識的には、三時間笑っただけで血液細胞の働きに変化が生じるとは、とても考えられないが、実験結果は驚くべきものだった。笑う前にキラー細胞の強さが正常範囲より低い人々も、笑った直後には全例正常範囲に上昇していた。笑う前に正常範囲内の強さを示した人々も、さらに強くなっていた。笑うことによって、キラー細胞がガンを攻撃破壊する能力が増強されたのだ。

もうひとつの検査項目としてCDレバ比（ヘルパーT細胞とサプレッサーT細胞の比率）も測定した。この値が低すぎると、やはりガンに対する抵抗力が弱いとされ、一方、高すぎると膠原病・リウマチなど自己免疫疾患になりやすい。三時間笑うと、低すぎる人は高く、高すぎる人は低く、正常値の方向に向かった。

つまり、笑うことはガンに対する抵抗力を高めると同時に、膠原病・リウマチの免疫異常も改善させる効果があると言えるのだ。（ノーマン・カズンズを思い起こさせる。）その後、日本医大の吉野慎一教授が、リウマチ治療中の人々に落語を聞いてもらい、やはり笑う前後の血液検査を試みた。その結果、リウマチの場合、異常に増えるインタロイキン6が減少し、また関節の痛みも軽くなった。以上の結果はすべて、人がユーモアのある話を聞いておもしろいという気持ちになって笑った場合の反応で

ある。

さらに、おもしろい話など聞かなくても、表情だけ笑顔を続けた場合はどうなるだろうか、という実験をした。六名の大学生に、おもしろいものなど何もない個室に一人ずつ入って、表情だけの笑顔を二時間続けさせた。その前後の血液検査をしてみたところ、なんとキラー細胞の強さは、弱い人と正常範囲の人々は、笑顔を続けるだけでも強くなったのだ。

おもしろくて笑うことはもちろん、表情で笑顔を作るだけでも、体内の自然治癒力（免疫力）を強くすることになるのだ。

4-2 A10 快感神経の発見

人間の脳神経は、生命機能をつかさどる**脳幹**、感情・記憶・意欲といった自分らしさを生み出す**旧皮質大脳辺縁系**と、動物にはない知能を処理する**新皮質**の三階立てから成り立っている。この三階立てを貫いて、快感によって活性化し、それを伝える神経システムが存在することが発見された。それは**A10 快感神経系**と名付けられた。この神経の情報伝達物質はドーパミンであることもわかった。覚醒物質はこれと同じ構造をしている。

これは人間しか存在しないシステムである。この神経系の経路をたどっていくと、まず、落語を聞いて笑うときは、新皮質の前頭連合野が喜びを生み、その下にある大脳基底核の作用で顔の表情が朗らかになる。また逆に、たとえ可笑しくなくとも、微笑みを作れば、このシステムを刺激する。人間にとって最も高度な感情である「愛する」ことは、旧皮質大脳辺縁系が働くことによるが、これも A10 神経システムを大いに刺激することになる。このシステムが、それに繋がる各層のいろんな箇所で、刺激され活性化すれば、そのシステムの基底にある脳幹の免疫中枢や内臓脳がさらにより状況におかれるのだ。

大笑い、微笑み、ユーモア、楽しい思い出の回想など、たとえ形や原因がちがっても、喜ぶことが体により影響が出るのは、人間だけがもつこのシステムの作用である。

5、 ほほえみから高笑いまで

以上の論述を紹介していて、すこし私流の補足が必要になっているように感じた。

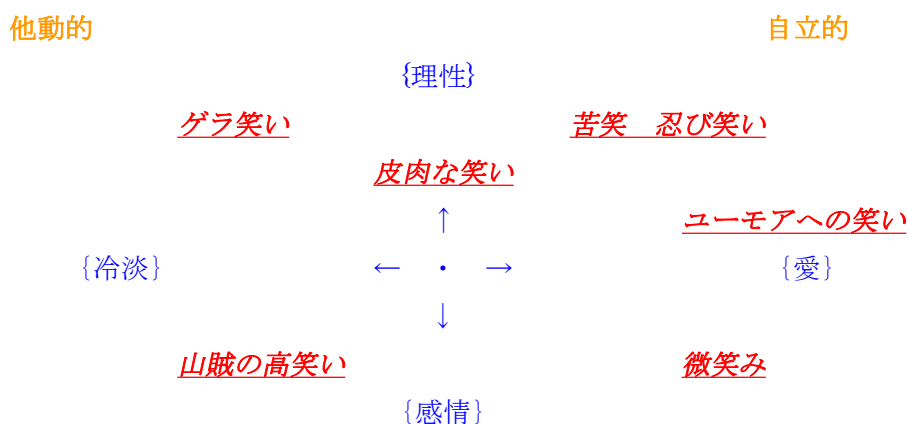
一口に笑いといっても、ほほえみから、山賊の高笑いまで様々な種類がある。「お笑い」と言えば、ベルグソンが研究の対象とし、ノーマン・カズンズが自分の治癒に使

ったような、喜劇映画を見て、げらげら笑うようなことを指している。また山賊の高笑いは、獲物を前にして、優越感と達成感を表現した罪深いものだ。忍び笑いはどうか。ベルグソンが指摘したように、笑いは屈辱を与えて矯正させることを機能としていて、その点では「善良でなく、ほんの少しの意地悪さや、いたずら気がなければ、機能しない」わけだから、それに気がつけば、その気恥ずかしさに、笑いをかみ殺すのが忍び笑いであろう。

ベルグソンの研究でわかることは、この種の笑いは、理性のみに働き、感動は笑いを止めると言っている。しかも滑稽な芸を見て、笑わずにはいられないといった受け身の動作だ。

イギリス流ユーモアはどうだろう。知的であり、自発的であり、世の中を明るくしていきたいという、愛情に満ちたものだろう。また、愛の共感を呼びかける微笑みの表情は、理性でなく感情であり、全く自発的なものだ。

最近の研究が明らかにしたように、身体に積極的な影響を持つのは、必ずしも、げらげら笑いばかりではなく、明るいほほえみを受けたり、与えたりすることでも、同じように良い影響があることがわかった。ほほえみとゲラ笑い、山賊の高笑いは、それぞれちがった心理的行動であると考えるのが妥当である。これらを考えて、心理的バックグラウンドのなかで、これらの笑いをマッピングしてみると下の図のようになりそうだ。



人生にとっては、他動的なゲラ笑いは楽しいが、自身から生み出す微笑みは、もっと大切なものと私は考える。赤ちゃんは、天使の微笑をいただいてこの世に生を受ける。その天使の微笑みに、大人が喜んであやし、ほほえみ返すとき、赤ちゃんは、ほ

ほえみを増幅させる。そしてそのように育った赤ちゃんは、いつも人に微笑をかえすことのできる人に育つといわれる。大人になると、この天使の微笑みは忘れる。しかし大人はその意味の重要性を認めれば、いつでもで自律的にほほえむことができるのだ。それは健康にもよいものだし、何よりもそれは、対面する人々へ贈ることの出来る最高の愛の贈り物なのだ。

<あとがき>

ベルグソンの存在を知ったのも、また読むように勧められたのも、加藤先生からであった。加藤先生は高校時代一番影響を受けた教師であり、私が 50 才台になった頃、逗子に引っ越して来られた縁でしばしばお尋ねし、再び多くのことを学ばせていただいた。その中のひとつがベルグソンであった。

先生はベルグソンのことを正面から語られることは少なかった。はじめは先生が読んでおられる本の名を盗み見てその名を知り、その時の好奇心から、彼の「道徳と宗教の源泉」を斜めに読んだ。これはじっくり時間をかけて読もうと思っていた矢先に、再び遠くに転宅されておられた先生から電話をいただき、ベルグソン全集の 4 巻と 6 巻にあるものは少なくとも読むように勧められた。

ベルグソン全集は茅ヶ崎の図書館も藤沢の図書館も蔵書はしていたが、利用者が少ないために閲覧が不便になっている。神田の古本屋で今は絶版になっている白水社の全集を探し出し、これまで買った書籍の中では一番高い買い物だったが、よるこんで購入した。長い時間の取り組みが予想されたからである。むつかしいので、遅々として進んでいないが、読むにつれてどの著作からも、人生を揺るがすような思いに駆られる。

人に紹介するには、自分の無力さに、たじろぐ思いがあるが、それを自分に強いることで、読破のペースメーカーになると思い、出来る分だけ少しづつ非力な紹介をやっていきたい。

◎ ベルグソンはどんな時代に生きた人か。

誰でもこだわりのある時代がある。私は自分が生まれた頃ということと関係するが、

1930年代の世界に、さまざまな思いがある。ヨーロッパではヒトラーが政権をとってドイツだけでなく世界を地獄に落とし始めた。日本は満州事変から長期の戦争に突入した時代だ。

ベルグソンは、この頃 1932 年最後の最大の主著「道徳と宗教の二源泉」を完成した。そしてヒトラーの占領下の冬のパリで、ユダヤ人への迫害の危機にさらされながら、ストーブの火も消えた寒さの中で、肺炎で亡くなった。

ベルグソンの人生の激動的な活動期は、20世紀の世紀末をはさんだ20年である。彼が生涯過ごしたフランスの当時は、美しいパリを造ったナポレオン3世が普仏戦争にやぶれ、動乱の中で生まれた第3共和制の不安定な政権交代の時代であった。そこでは、フランス革命の後継者である社会主義的労働者左翼勢力と、反ドイツであるが、ナチと同根の反ユダヤの民族主義でファシズム右翼ナショナリストのせめぎ合いがあり、その中間で、力を付けた資本主義勢力が、領土拡大の植民地帝国主義がすすむというにぎやかな時代であった。

1914年に始まった第1次世界大戦では、フランスは大きな国民的被害を被りながら、ドイツに対して戦勝国となるが、ドイツに対して課した巨大な賠償金を取れず、かえってドイツの報復主義ナチスを生み出してしまった。

失敗に終わったとはいえ、第1次大戦後の戦後処理として、フランスは米英と協力して、理念的には恒久平和をめざす国際連盟をうち立てる。当時フランス教育界での最高権威となっていたベルグソンは、対米使節になり、また国際連盟の国際知的協力委員会の議長に選ばれ3年間、リューマチの悪化で辞任するまでその任についた。ノーベル文学賞を受けるのは、その後まもなくのことであった。

フランスの青年たちに対するベルグソンの哲学の影響は大きく、「第1大戦に従軍した多くの青年は戦争を通じて哲学者ベルグソンのいう『生命の飛躍』や、『創造的進化』を成し遂げることができるかもしれないという漠然とした期待を持っていた。だが戦争の現実も戦後の現実も過酷であった。青年たちの希望はことごとく裏切られた。」(河野健二 フランス現代史)

人類のある種の希望を託した国際連盟の存在は、しかしやがて破滅し、その対極にあるナチスドイツのフランス占領にいたり、その社会的悲惨さの中で、彼はひっそりと人生を閉じた。

ベルグソンは、ユダヤ系ポーランド人音楽家を父とし、現実を処理することに巧み

なイギリス人の母を持っていた。中学生時代から天才ぶりを発揮し、特に数学に非凡な才能を見せた。エコール・ノルマル・シューペリオールへの準備段階で出した数学コンクールの解題は学界の注目するものであったという。

あたかもベルグソンが生きた時代は、原子構造に関する理論と実験が大展開をとげ、アインシュタインの相対性理論〔1916年〕が生まれた時代であった。哲学者のみちを歩みながら、当時ほんの一握りの人しか理解できなかったといわれる相対性理論における時間についての論究もなしとげているのである。

◎ ベルグソンのなにを成し遂げたのか。

ベルグソンは、人間のいのちの意味を説き明かそうとしたのだ。
その問いを、人間の前に、生命の起源から、いのちのないもの物質との境目にもどって説き明かそうとしたのだ。
その問いを、人間の社会的営みの来し方と発展を見据える中で解き明かそうとした。
その問いを、肉体とは、精神とは何かを解き明かそうとした。
彼の教えは人間を、根元から、そして、生涯にわたって、勇気づけるものである。

◎ 現代にどのような影響を与えているか。その哲学思想の全体と現代の展開。

ベルグソンは20世紀の前半という激動と混迷の時代に生きた。彼はフランスの人民戦線や、対立物であるファシズムを日常の世界で経験していた。マルクス哲学、その実践であるマルクス主義が、ロシアで始めて権力を握り、それは人類の問題のすべてを解決してくれるかのように見えていた時代であった。
その同時代、ベルグソンは、その一過性を見抜き、人間社会は、閉じた社会と開かれた社会を、行きつ戻りつしながらも、開いた社会を目指して進むと説いた。彼の見抜いたとおり、ロシア政権はその閉ざされた性質のゆえに崩壊していった。

20世紀の全般は物理学が、原子核の構造を解き明かし、科学の申し子である電気文明、機械文明、あるいは戦争の技術までも、飛躍しつつある時代だった。人の存在も精神もすべて科学の手で、解明できると自信を持っていた時代である。
そのとき、ベルグソンは、科学で解明できることには限界がある。その意味を問うこ

とはできないと、解き明かした。特に精神が頭脳の活動によって生み出されるとする生理科学の主張の誤りを説いた。

彼が取り組んだテーマは、100年たった今の我々の問題であるし、永遠の人間の問題であるといえる。そして現代社会でますますホットとなっているテーマにたいして、重要な指針を与えてくれているのである。人類がこのような根元的問題でベルグソンのような師を持ち得たことをいくら喜んでも足りないことかと思う。

◎ 主著と発表年代

- 1889年 **時間と自由** (学位論文)
- 1896年 **物質と記憶**
- 1900年 **笑いについて**
- 1901年 夢 (後に**精神のエネルギー**に収録 1911年公刊)
- 1902年 知的な努力 (精神のエネルギーに収録)
- 1903年 形而上学入門 (後に**思想と動くもの**に収録1934年公刊)
- 1904年 脳と思考 (精神のエネルギーに収録)
- 1907年 **創造的進化**
- 1908年 現在の回想と誤った認知 (精神のエネルギーに収録)
- 1911年 哲学的直感 (思想と動くものに収録)
- 1911年 変化の知覚 (思想と動くものに収録)
- 1911年 意識と生命 (精神のエネルギーに収録)
- 1912年 心と体 (精神のエネルギーに収録)
- 1913年 生きている人のまぼろし 心霊研究 (精神のエネルギーに収録)
- 1922年 **持続と同時性**
- 1930年 可能と現実 (思想と動くものに収録)
- 1932年 **道徳と宗教の二源泉**

(ベルグソン紹介第1回「笑いについて」2004年1月21日三水会にて発表)

